

アメリカ科と私の人生

第10期 藤井 希祐 (1962年卒業)

「将来君は何になりたいの？」と自他ともに問われていた頃から、いつ、どのようにして現在までの人生経路を辿ってきたのかを簡単に振り返ってみたいと思います。

まずは高校時代、日比谷高校3年の東大受験願書提出の時点で、私は「理一」(応用化学希望)で担任教諭経由、やや迷いながらも堂々と提出したところ、2年、3年連続担任の名物数学教諭(あだ名が「お獅子」)から、突如密かに母親が学校に呼び出され、「息子さんは理系で受験をご希望の様だが、私は文系向きだと思いますよ！でも自分からは直接は言いにくいので、お母さんからこっそり話してくださいませんか？」との助言があったことを後から知らされました。

私は男3人兄弟の末っ子で、親が機械屋(町工場経営)、兄二人共理系に進学、自分もごく自然に理系希望と思い込んでいただけで、私が尊敬していた担任先生からの助言には強い影響を受けました。

これこそ進路指導(第一弾)の賜物で、結果、受験科目も一部入れ替え「文二」向けに急遽変更、駒場ジュニア時代は「フランス語クラス」で過ごすことになりました。

文系進路に切り替えてからは、自分の進むべき道は公・民間問わず外国との関わりを目指すという漠然とした想いでしたが、教養学科(Area Studies)の存在を知り、「これだ！」ということで、駒場2年の半ば、同志望の高校以来の親友(同じ文二仏語)と互いに成績を見せ合って、「俺はイギリス科！」と相方が言うので、「お前と一緒に嫌だから俺はアメリカ科！」と方針を決めたのでした。

今から思えばこれほど『いい加減な』進路選択であった訳で、アメリカ科の中屋健一先生のことや授業内容も諸先輩の方向等も殆ど知らない状態で中屋教室での初面接の際、「お前、ひょっとして外交官志望ではないだろうな！もしそんなとんでもない了見を持っているとしたら俺の科に入っても無理だよ！試験勉強の時間など卒業するまで無いぞ！それでも入りたいというなら、外交官試験は駒場を卒業してから本郷に学士入学し直して受けるんだな！！」と一方的に言い放たれたのが最初のお言葉でした。

正直、その時点で外交官志望を密かに抱いていたのは事実で、中屋先生の強烈な先制攻撃に圧倒され、その志望は徐々に萎んで行きました。(進路指導第二弾)

アメリカ科に入った前後の駒場時代、安保反対真っ盛りの学園ムードの中で、中屋先生の言われた一言「お前達の反対している安保が終わるときは、やめるのはアメリカ側だよ！」は、今でも見事に生きていると思われます。

中屋先生の厳しい授業振りは既に諸先輩が語り尽しておられるので、「良く学べ！良く遊べ！」の遊びの部分を中心に先生との思い出を語ってみましょう。

年末年始休暇と学年末休暇の度に、さあ行くぞ！と1週間から10日の中屋スキー教室の旅に出かけるのが当時は珠玉の想い、楽しみでした。

その頃は概ね貧乏学生の我々を引き連れて、中屋先生ご昵懇の著名な文芸・評論・ジャーナリスト連(いわゆる文化人)のご令息・ご令嬢達共々、自炊生活主体の、グレンデ作り・山スキー中心のスキー旅は、自然・人間・環境との交流・接触・融和を育む上で、社会に出てから長い人生においてどれほど役立ったことか！

卒業後も講演会、ゴルフ会、飲み会等々でご一緒の度に、「おい、希祐(まれすけ)！元気か？」と親しく声をかけて頂き、ワイフ共々可愛がって頂いた頃が懐かしく蘇ります。

アメリカ科4年の夏休み前、産業関連の嘉治真三先生のゼミの途中でふと二人きりになった折に、「藤井君、夏休みに2~3週間珍しいセミナーがあるけど出てみないか？」とのお誘いを受け、米国クエーカー教団主催の「国際学生セミナー」(東京女子大キャンパスを拠点に、女子学生の茜寮に2週間缶詰になって米・欧・アジア諸国の学生との共同学習・交流を図るセミナーで、嘉治先生がその年のディーン/司祭長をお勤め)に日本学生代表の一人として参加。国連の明石康先輩もチームリーダーとしてご参加、我々と寮生活を共にされました。

その時の参加学生仲間が明石先輩を中心に今日に至るまで食事会等集会を毎年続けており、これも私にとってはアメリカ科の大きな遺産のひとつです。

中屋先生による卒業前の最後の進路指導(第三弾)は、私が就職先を商社かメーカーか迷っていた折に、「おい、希祐、商社に行くなら住友商事に行け！宇野に話して置く！！」と例によって問答無用。(宇野信夫氏は当時の住商人事担当重役で中屋先生の友人)

早速住商訪問、面接、試験、内定通知と夏休み前に就職先が決まり、最後の抵抗として、メーカーに行くなら「住友化学」と心に決めていたので、密かに嘉治先生に相談し、紹介状持参で住化の人事担当重役に面談に上がり、全てを正直に話して裁断を仰いだ結果、「そういうことなら、貴方の場合は住友商事に行った方が良いでしょう」となり、内定通り住商に入社し、40有余年の会社生活を経て今日に至っているのが私の『今日までの人生』であり、アメリカ科との関わりでもあります。

以上、極めて個人的な履歴・想いを語り綴って参りましたが、どうぞご容赦願います。